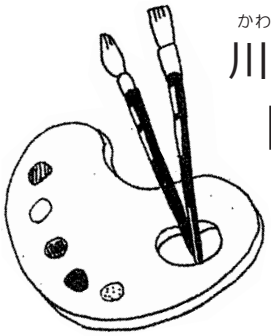
公民館の図書室は　学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

2023年（令和5年）5月5日
第720号

国立市中1－15－1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館

〈図書室のつどい 参加者の感想〉



川内有緒（かわうち　ありお）著

『目の見えない白鳥さんとアートを見にいく』に参加して

篠沢 久二子

著者の川内さんと全盲の美術鑑賞者で写真家でもある白鳥建二さんとの対談終了後に著者の川内さんにサインをお願いした。本を手渡すと、内表紙の黒い長方形の上に、ゴールドのインクスタンプで「開かれた窓」が捺され、その下にメタリックシルバーのペンでサイン、それに「Bon Voyage!」というフレーズが書かれて戻ってきた。製本時に既にそうなることが計算されていたかのように、それらが書かれた内表紙は1枚の絵画のようだ。Bon Voyage ＝良い旅を。行ってらっしゃい。そのフレーズに送り出されて「目の見えない白鳥さんとアートを見に行く」旅は始まる。

旅先案内人は白鳥さんである。といっても、この本は白鳥さんによる美術館のガイドブックではない。無論、著者が白鳥さんと訪れたさまざまな美術館や諸々の作品のことは書かれているし、それはそれで興味深いのだが、全編において根底にあるのは、白鳥さんの素朴な質問「なにが見えますか？」である。その問い一つで、物の見方や感じ方、捉え方、思想や記憶を探る内面への旅へと人を向かわせてしまう。対談中の川内さんの言葉に『『すごく絵の見方が変わる』』とあった。ことによって『すごく絵の見方が変わる』とあった。当たり前のことのようだが、実際に試してみると、「すごくよく見る」行為は「ものすごく脳を使う」ことを痛感する。相手にわかるように説明しようとすれば言葉も使うし気も使う。脳トレどころではない。ただ、白鳥さんは作品を理解することを目的としているのではなく、「みんなで見る、話すというプロセスの中で意味を探ったり、発見していくのが面白い」と言う。質問の答えの言葉を一切否定しない、そんな白鳥さんとだからこそ、「一緒にアートを見に行きたい」旅人希望者が後を絶たないのだろう。

長く暮らした英国はロンドンの美術館や博物館の多くは入場無料であった。午後3時に陽の落ちる、長く寒い季節には、連日終日美術館で過ごす人も少なくない。美術教師に引率された小学生がぞろぞろと15名ほど入ってきて、めいめい気に入った作品の前の床に寝そべったりベンチに腰掛けたりして、好きな姿勢で好きなように模写をし、自分は何故その作品を選んだのか、なぜ、どこが好きなのかをクラスメイトらに発表する、という場面に何度か遭遇した（ちなみに、友人の中学生の娘の修学旅行先は隣国フランスのルーブル美術館だった）。「美術館とは、長蛇の列に並び、高い入館料を払い、数点の高尚な名作を数分の間、静かに静かに拝みに行くところ」という日本での先入観が染み付いた私は、文化の違いに溜息をつきながら、子どもたちが自由に美術を楽しむ姿を楽しんだ。「白鳥さんの美術鑑賞」はこれに近いのかも知れない。私が美術館で鑑賞したのは、展示作品ではなく、小学生らの「美術の時間」そのものだった。我が息子も五歳の時に学校で「マチス」を習い、さまざまな形や色の紙を組み合わせ、見事にマチスっぽい栞を作ってきた。この「見事にマチスっぽい」の正体が一体何なのか、どういうことなのか、なぜ自分はそう思うのか。自分は何が見えているのだろう。何が見えていないのだろう。「見事にマチスっぽい」栞を「目の見えない白鳥さんとアートを見に行く」に挟んで、私はまだまだ一人で旅の途中である。

（集英社インターナショナル）

〈作家と作品・連続講座　参加者の感想〉

「新海誠の表現世界～初期作品から最新作『すずめの戸締り』まで」に参加して

2022年8月25日・9月1・15・29日・10月6・20日開催

中西 景子

公民館でアニメ講座が聞けるなんて新鮮な驚きだった。しかも取り上げるのは、今をときめく新海監督。私は『君の名は。』で初めて新海誠の名を知ったし、榎本先生のお話を聞くのも初めてで、著書も読んだ事がなかったが、初回から〝目からウロコ〟の連続で、新海作品を隅々まで読み解く内容に、どんどん引き込まれた。先生は、同じテーマの講義を大学では90分×14回、半年かけるところを本講座はたったの120分×6回だったので、先生の著書や、監督の手によるノベライズ本を予め読み、講義の前後には作品を観て理解を深めるよう務めた。すると中高校生時代に戻ったようでワクワクした。アニメ雑誌を読み耽り、ファーストガンダムに夢中だったあの頃、アニメ関係の仕事に憧れていたことを思い出した。

「一つ一つのカットに目を凝らして、そこに一体何が描かれているのかしっかり見据えて、観客自身が物語を自分の頭の中で生成していく」ことがアニメを見るということだという先生の言葉は衝撃的だった。そして「アニメは一瞬映るシーンに全てが語られている。偶発的な事象が映り込む可能性のある実写とは違い、アニメは必ず意図して描かれている。」とも。私は今まで、いかに漫然とアニメを見ていたのかと、ただただ茫然としてしまった。

第1回は処女作『遠い世界』『彼女と彼女の猫』『ほしのこえ』について。「処女作の中には、ほぼ全てが完全にある」との先生の言葉通り、新海監督の全てが見事に凝縮されている。新海監督がアニメを専用に作る場の出身ではないことが他の追随を許さぬユニークさにつながっていることも知った。第2回は『雲の向こう、約束の場所』『秒速5センチメートル』。第3回は『星を追う子ども』『言の葉の庭』。第4回は『君の名は。』。第5回の『天気の子』を劇場公開時に見て印象に残った場面がある。主人公が家出し、新宿のネットカフェで愛読書らしき村上春樹訳の『The Catcher in the Rye キャッチャー・イン・ザ・ライ』でカップ麺の蓋を押さえる描写の、細部へのこだわりっぷりに感嘆した。リアリティを出すために実在する物を描き込むのが新海作品の特徴という解説に納得。第6回は最新作『すずめの戸締まり』。『君の名は。』『天気の子』と合わせて災害三部作というそうだ。『すずめの戸締まり』は、まさに震災を扱っている。しかも3．11から11年後の11月11日に公開され、東日本大震災へのこだわりが感じられる。忘却をテーマとして扱っていた『君の名は。』では、東日本大震災の被災地を彷彿とさせる立ち入り禁止のバリケードが描かれ、これも福島原発事故を想起させる。今年7月には福島第一原発の放射能汚染水が海洋放出されようとしているし、原発事故の被害は依然として続いている。一方、私たちの記憶から3．11が薄れていることも否めない。アニメはエンターテインメントではあるが、大事なこと、忘れたくないこと、忘れてはいけないことを記憶に留める役割を担っているのかもしれない。

くにたちブッククラブ

―記憶の欠片を拾い集めて―

藤野可織『ドレス』（河出文庫）

講　師　山岸 郁子（日本大学・日本近代文学）
と　き　5月11日（木）夜7時半～9時半
ところ　公民館 地下ホール
申込先　公民館 ☎(572)5141

＊次回は6月8日（木）
山田詠美『ファーストクラッシュ』
（文春文庫）です。

新着図書から

〈哲学　心理学　宗教〉

原典朝鮮近代思想史1～6　宮嶋博史編（岩波書店）129

〈歴史〉

難民に希望の光を　真の国際人緒方貞子の生き方　中村恵（平凡社）289

京都不案内　森まゆみ（世界思想社）291

〈社会科学〉

資料沖縄問題　（旬報社）319

国際平和を歴史的に考える　岡本隆司編（山川出版社）319

SNSフェミニズム現代　井口裕紀子（人文書院）367

14歳から考えたいセクシュアリティ　ヴェロニク・モティエ（すばる舎）367

タフラブ　絆を手放す生き方　信田さよ子（dZERO）367

このからだが平和をつくる　安積遊歩（大月書店）369

いつか来るとわかっていた介護　今泉容子（彩流社）369

サイボーグになる　キム・チョヨブ（岩波書店）369

精神障害を生きる　駒澤真由美（生活書院）369

ボーダー　移民と難民　佐々涼子（集英社インターナショナル）369

津久井やまゆり園「優生テロ」事件、その深層とその後　佐藤幹夫（現代書館）369

残土の闇　静岡新聞社（静岡新聞社）369

「脳コワさん」支援ガイド　鈴木大介（医学書院）369

3・11震災を知らない君たちへ　鈴木利典（ぱるす出版）369

公民館における災害対策ハンドブック　全国公民館連合会編（第一法規）369

認知症が拓くコミュニティ　手島洋（クリエイツかもがわ）369

シンクロと自由　村瀬孝生（医学書院）369

生涯学習と地域づくりのハーモニー　田中雅文（学文社）379

〈共生と自治〉の社会教育　辻浩（旬報社）379

ルポ　アメリカの核戦力　渡辺丘（岩波書店）393

〈自然科学〉

やってくる　郡司ペギオ幸夫（医学書院）404

Forget　it　Not　阿部大樹（作品社）493

〈工業〉

食をめぐる「菌」の話　今野宏（産学社）588

やまと尼寺精進日記　1～3　NHK「やまと尼寺精進日記」制作班（NHK出版）596

ウクライナの料理と歴史　オレナ・ブライチェンコ（小学館）596

〈産業〉

世田谷・大平農園けやきが見守る四〇〇年の暮らし　大平美和子（旬報社）611

〈芸術〉

草木の聲　志村ふくみ詩（京都新聞出版センター）753

木下恵介とその兄弟たち　木下忍（幻冬舎メディアコンサルティング）778

〈言語〉

「日本人の日本語」を考える　庵功雄（丸善出版）810

〈やさしい日本語〉と多文化共生　庵功雄（ココ出版）810

〈文学〉

怪奇文学大山脈　荒俣宏（東京創元社）908

この父ありて　梯久美子（文藝春秋）910

リバー　奥田英朗（集英社）91お

失踪願望。　椎名誠（集英社）91し

ホットケーキが焼けるまで　髙橋丁未子（静人舎）91た

目取真俊短篇小説選集　1～3　目取真俊（影書房）91め

罪の境界　薬丸岳（幻冬舎）91や

私のことだま漂流記　山田詠美（講談社）91や

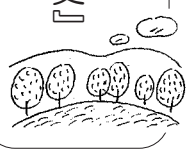
希望ではなく欲望　キム・ウォニョン（東京クオン）92キ

天文学者は星を観ないシム・チェギョン（亜紀書房）92シ

ペストの夜　上・下　オルハン・パムク（早川書房）92パ

〈一節〉

海野聡 著『森と木と建築の日本史』



日本の森林と木の文化―木が作りあげた文化

日本人は木とともに文化を作り上げてきた。日本列島の山々は木々に覆われ、緑にあふれた風景が広がっているが、これらの森林のめぐみを享受することで、木の文化ははぐくまれてきたといっても過言ではない。世界最古の木造建築である法隆寺金堂をはじめ、前近代の建物のほとんどが木でつくられてきたことはその証しのひとつといえる。また、木とともに歩んだ長い歴史のなかで、身近な生活道具から美術工芸品に至るまで、木を扱う深い知識と高い技術を蓄積して来ており、世界に誇るべき日本の文化である。

いっぽうで現代の日本、とくに都市部では鉄やコンクリートのビルやマンションが林立し、人びとは屋外を見るにもガラスの窓越し、室内を見わたしてもプラスチック製品に囲まれ、化学繊維の衣服を身にまとっている。日常生活と森や木との距離が離れているため、森林のめぐみを実感しにくいかもしれない。とはいえ、春にはサクラ、秋にはモミジと、木々の告げる季節の移ろいは私たちの感性に息づいている。言葉をみても、ちぐはぐな状態を「木に竹を接ぐ」と表現したり、ハレの舞台を「檜舞台」といったりする。このように木々は今なお生活のなかに溶け込んでおり、単なる物質的な存在意義を超越して、日本の文化に深く根付いているのである。（岩波書店）

図書室のつどい

『水のない川 暗渠でたどる東京案内』

お話　本田 創（暗渠者・文筆家）

近年、散歩やまち歩きの切り口の１つとして、かつての川の跡「暗渠」が注目されています。

かつての川が人々の生活の変化などにより、どのような変貌を遂げてきたのか、人と川とのかかわり方といった観点を通じて、東京のまちの変遷についてお話いただきます。

暗渠を知ることで、まちの見え方がさらに多層的で豊かなものに変わるかもしれません。

〈本田さんの本〉

表題作（山川出版社）、『東京暗渠学』（洋泉社）、編著・共著に『東京暗渠散歩・改訂版』（実業之日本社）ほか

とき　6月25日（日）昼2時～4時

ところ　公民館　3階講座室

定員　会場受講 30名（申込先着順）
　　オンライン受講 30名（申込先着順）

申込先　5月17日（水）朝9時～
　　6月22日（木）夕5時

会場受講　公民館　☎（572）5141

オンライン受講　下記参照

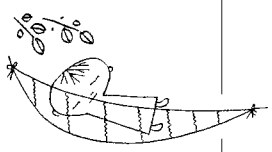
※参加方法の詳細は前日までにメールします。当日、参加側の環境による接続や音声の不備についての問合せには、対応できませんので、あらかじめご了承ください。

【オンライン受講申込のメールに明記いただく事項】
申込先：sec_kominkan@city.kunitachi.lg.jp
件名：図書室のつどい講座
本文：①氏名　②ふりがな　③住所　④電話番号

〈私の本棚から　第2回〉

伊集院静 著『ミチクサ先生』

今村 三郎



伊予松山出身で、日露戦争で活躍した秋山好古・真之兄弟や、俳句・和歌等の革新にかけた正岡子規を主人公とした、司馬遼太郎の『坂の上の雲』は私の愛読書の一つです。息子の名前に著者名をもらうほどでした。その中で、夏目漱石についても、少しふれられています。

今回のこの本は、夏目漱石を中心として、その鏡子夫人や長兄の大助等の家族、子規など友人たち、寺田寅彦ら門弟との交流を描いた小説です。

夏目金之助、雅号を漱石、は子供がいる家に久しぶりに生まれた子供、いわゆる〝恥かきっ子〟として奉公人の里子に出されてしまいます。事情があり、しばらく母子とも夏目の実家に戻ります。そのとき大助と出会います。大助は弟金之助の才能に気づき、その後、大きな力になります。一つは金之助を寄席小屋に連れて行ったこと、もう一つは英語を薦め、進学させてくれたこと。金之助は寄席小屋で噺家の話を聞いて落語に興味を持ち、のちの仕事に大いに、影響されます。またこれからは英語の時代になると思い、「漢籍、漢詩もいいが、外国語を習え。やるなら英語がいい」とすすめ、実父に「学費を貸し付けてくれないか」と談判します。幼少から青年期にかけて、肉親の関与がその後の人生に大きく影響します。私も恥かきっ子で、進学の際に、相談した長兄の励ましが大きかったのを思いだしました。

子規も祖父から漢詩の手ほどきを受けます。この時代の人のそれが素地になっており、大学予備門での米山保三郎を加えた3人の親交のもとになります。子規、漱石といえば俳句は切り離すことができません。子規は「蕪村を学ばねば本物の俳句には近づけんぞな」と教えます。去年、初めて俳句をつくった私には、よくわかりませんが、写生俳句を重視するということなのだそうです。子規の代表作「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」も東大寺の鐘であったとか聞きました。テレビの番組によると、この句には漱石の句が下地になっているとか……。

鏡子夫人のことは、単行本下の表紙にあるような美人であり、金之助は旅行の際、月光の下にいる彼女を見てその美しさに思わずつぶやきます。「I love you.」講義の中で、学生にその和訳を問われて「『月が綺麗ですね。』とでも訳せ」と回答したそうな。

金之助は松山の中学から熊本の五高、帝大講師と赴任します。その時の収入や家賃に触れられています。中学の給与八十円は校長の六十円より高いのです。五高では百円。家賃は「名月や十三円の家に住む」となっています。帝大では年俸合わせて千五百円の高給をとっており、二十五円もの家賃を払っていました。自分では、言いたくはありませんが、他人の収入は知りたいものです。でも生活のためだったら聞かないわけにはいけませんね。だって「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥。」ですものね。

（講談社）